



大久野の幸神地区にある幸神神社は建武2年(1335)に京都から山城国出雲路幸神を奉遷し、幸神大神と称したのが始まりといわれています。文安から永禄(1444~1570)の頃に社殿が再建され、明治2年(1869)に幸神神社と改称されました。拝殿に向かって右手には神楽殿があります。

境内の参道入り口付近には国の天然記念物のシダレアカシデがあります。その名が示すとおり根元から屈曲して分かれた大小の枝が、らせん状によじれながら垂れていて、全体を見渡すとお椀を伏せたような優雅なかたちをしています。この樹形は自然なものではなく、盆栽のように人の手によって長い年月をかけて仕立てられたと思われます。



幸神の**重松流祭囃子**は、平井に伝わった重松流祭り囃子が五日市を経て伝わったものといわれています。平井は春日神社の志茂町囃子・加美町祭囃子、八幡神社の八幡囃子と共に、「重松流祭囃子」として町の文化財に指定されています。
重松流祭り囃子は所沢出身の古谷重松(天保元年(1830)生)が考案し、明治5~15年(1872~82)頃に家業の藍染の行商をしながら各地に伝え歩いたといわれています。重松が行商の際に宿を取っていた平井地区では特に熱心に指導が行われ、平井地区では重松が考案した全曲が伝授されたといわれています。

さじかみじんじゃ
幸神神社



さじかみじんじゃ
幸神神社祭礼

毎年3月の26日に近い土日に行われる幸神神社の祭礼では、神輿が区内を練り歩き、山車の巡行が行われます。区内を巡行する山車では、2つの小太鼓の軽妙な掛合いとテンポの良さが特徴的な重松流祭囃子が奏でられます。重松流祭囃子は平井の志茂町・加美町・八幡の3つの囃子と共に町の文化財に指定されています。

